

第五回科学者京都会議声明

今から三年前に開かれた第四回科学者京都会議以来、核兵器体系の開発競争は、ますます激しく続けられ、ついに海洋および大気圏外空間にも「使える核兵器」およびその迎撃兵器体系の大量配備を促す段階に至った。その結果、わが国をとりまく東アジア・太平洋地域が核戦場になる危険が急速に高まっている。しかも前回の「声明」で私たちが警告した「わが国の内部に起こりつつある軍事化の動き」は最近とみに活発化してきている。

このような事態をうみだしてきた軍備競争の非生産性は、今や国際的な共通認識である。第一回国連軍縮特別総会（一九七八年）の「最終文書」は次のように述べている。「何千億ドルもの金が毎年兵器の製造や高性能化のため費やされ、世界人口の三分の二の人々の窮乏・貧困と、暗鬱かつ劇的なコントラストをなしている。この膨大な資源の浪費は、あらゆる国、とくに発展途上国における開発にとって、緊急に必要なとされている物的資源のみならず技術的・人的資源をも、軍事目的に振りむけているという点できわめて重大である。」

この軍備競争を支えてきた要因の一つである軍事的研究・開発に従事してきたのは、科学・技術の素養を身につけ、その訓練を受けた科学者および技術者である。しかもその数はストックホルム国際平和研究所（SIPRI）によれば、全世界の科学者・技術者の四分の一に達している。

国家を防衛する手段としての兵器体系の研究・開発に科学者が従事するのは当然である、という根強い世界的風潮がある。この風潮は科学・技術が総体として国家の支持なしにはきわめて困難になっている今日、むしろ強められている。もちろん個人としては、今日の軍事研究・開発の不条理と危険性を痛感している人の数は、世界的に見て、必ずしも少なくはない。そして、その人にとって国家への忠誠か人類への忠誠かは避けがたい選択として問われつづけてきたのである。

広島・長崎の被爆によって、核戦争の実相を認識せざるをえなかった私たちは、第二次世界大戦中に科学者がとった態度についての反省からも、戦後、戦争の放棄と戦力の不保持を内外に宣言した日本国憲法のもとで、真理の探究と人々の幸せに役立つ技術の開発をめざしてきた。これはいうまでもなく平和を誓った圧倒的多数の日本国民の支持があったからである。

しかしながら、最近、内外の軍事化の顕著な情勢のもとで、日本国民の平和への意志を無視するような動きがあらわれている。すでに昨年暮れにはわが国と米国の間で「武器技術供与に関する交換公文」がとりかわされ、わが国の科学者・技術者も軍事的研究・開発に公然ととりこまれるおそれがでてきた。

わが国の「防衛研究費」の伸び率は突出している防衛予算の伸び率をさらに上まわっている。それとともに軍事的研究・開発に従事する科学者と技術者の数は急速に増大する可能性が高まっている。

軍事的研究・開発には、諸外国の例が示すように、新しい科学と技術が貪欲にとり入れられるだけでなく、若い有為の人材をたえず補給することが必要となる。このため、現在の状況がこのまま続くならば、わが国においても「軍産学複合体」が形成されることは必至である。

私たちは、核時代の科学者として、世界的視野から社会的責任を自覚するとともに、日本人として平和への特別の任務を考えざるをえない。それはわが国における軍事的研究・開発の本格化

を未然に抑え、科学と技術をすべての人の知的発達と幸せに役立たせる道を追求することである。

その出発点として、私たちは科学が平和と人類の福祉にのみ貢献すべきものであることを確認し、そのために科学者本来の相互信頼の強化と、その基礎になる研究成果の公開性の拡大に努力したいと思う。もちろん、独創的な研究あるいはすぐれた技術開発に払われた努力は、国際的に尊重され、十分保護されなければならないが、それらは本来、秘密にされるべきものではない。

さらに、私たちは「科学研究者の地位に関するユネスコ勧告」（一九七四年）が、科学者・技術者の「関係する事業の人的・社会的および生態学的な価値について自由に意見を表明」する権利の保障を加盟国に求めていることを想起し、加えて「最後の手段として良心に従って身を退き」得る条件の保障を国に求めるものである。

軍事的研究・開発の危険は、国際的な管理によって解決されるものではない。軍事的研究・開発そのものを解消し、これにむけられていた人的・物的資源を平和的研究・開発に振り向けるべきである。それは核戦争の危機が、核軍備の国際的な管理によってではなく、核軍縮そのものによってはじめて克服できるのと同様である。

私たちはこの困難な事業にとりくむために、ひろく各方面の人々の理解と協力を訴えるものである。一九八四年六月二十三日 東京にて

有沢廣巳 有山兼孝 飯島宗一 石川栄世 石田 雄 井上ひさし
今堀誠二 江口朴郎 大江健三郎 大河内一男 大北 威
大槻昭一郎 大西 仁 岡倉古志郎 小川修三 小川岩雄 柏村昌平
久野 収 小沼通二 坂本義和 佐久間澄 澤田昭二 隅谷三喜男
関 寛治 高木修二 高野雄一 高橋 進 田中慎次郎 田中 正
谷川徹三 田畑茂二郎 都留重人 戸田盛和 豊田利幸 中野好夫
中村研一 西川 潤 仁科浩二郎 野上茂吉郎 福島要一 福田歆一
藤田久一 伏見康治 牧二郎 松本賢一 三宅泰雄 宮崎義一
安野 愈 山田英二